

# 日本語・英語・クメール語におけるオノマトペの対照研究

岩崎真哉\*

## A Comparative Study of Onomatopoeia in Japanese, English and Khmer

Shin-ya Iwasaki\*

### Abstract

This paper examines the features of onomatopoeia in Khmer in comparison with that of Japanese and English in terms of sound symbolism, and argues that the velar stop /k/ in the word initial in Khmer is associated with the hard surface of such objects as metal or concrete. I also argue that the glottal stop and aspiration in Khmer are associated with the meanings of words that are related to puffing. It is claimed that we find sound symbolism in onomatopoeias in Khmer as well as in Japanese and English.

### キーワード

オノマトペ、擬声語、擬態語、音象徴、クメール語

## 1. 序

本稿では、音象徴の観点から、日本語・英語・クメール語におけるオノマトペの比較対照を行う。オノマトペは、その音から得られる意味を表すので、言語によって共通点もあれば異なる点もある。本稿の目的は、英語・日本語のオノマトペ研究を基に、クメール語のオノマトペの特徴を明らかにすることである。<sup>1</sup>

オノマトペとは、(1)に見られるような擬声語・擬態語の総称を指す。<sup>2</sup>

- (1) a. カチッとドアの鍵を閉める  
b. いらいらと人を待つ  
c. 守備陣がバタバタしていた (NHK News WEB 2012/7/26)

これまでの研究により、日本語のオノマトペ語彙は、きわめて組織化され、英語におい

---

\*いわさき しんや：大阪国際大学国際コミュニケーション学部講師 (2012.12.6受理)

てよりも多いとされてきた。また、系統の異なる日本語と英語において共通する音象徴性が指摘されてきた。本研究では、両言語と系統が異なるクメール語を分析対象とするが、そのクメール語はオーストロアジア語族に属する。基本母音は9つあり (i, e, ε, u, o, ɔ, ʉ, ə, a)、長母音、二重母音、弛喉母音はこれら9つの短母音をのばしたり、組み合わせたり、音色を変えたりする音である。子音については、音節頭に現れる子音は22あり、有気音と無気音の区別がある。また、音節末の子音は弱くなる (和泉 1986)。このような日英語とは異なる言語においてどのくらい音象徴性に関して共通点が見られるか、考察していく。

構成は以下の通りである。次節で、日英語に見られるオノマトベについて、先行研究ですでに指摘された特徴を概観する。3節では、クメール語のオノマトベについて、音象徴の観点からその特徴を指摘する。そして4節で結語を述べる。

## 2. 日英語のオノマトベ

本節では先行研究で分析された日英語に見られるオノマトベの特徴を取り上げる。

### 2.1. 肥満と唇音性

田守・スコウラップ (1999) は、日本語と英語に共通する音象徴として唇子音 (p, b, m, w, f, v) と円唇母音と「肥満」の対応を指摘し、次のものを挙げる。<sup>3</sup>

- (2) 日本語：poteQ, puyo-puyo, debuQ, deQpuri, muchi-muchi, pocha, puriN-puriN  
英語：chubby, paunchy, podgy, pudgy

唇子音は発音する際に唇が関わっている音であり、英語では、円唇母音も含まれているが、それは唇の丸みを伴う音である。つまり、「唇」が関わる音が「肥満」の意味と結びついているのである。

この観察を裏付けるために、田守・スコウラップは「瘦身」と関係する語も調べている。

- (3) 日本語：gari-gari, geQsori, gisu-gisu, hyoroQ, suraQ  
英語：gangly, lank, lean, skinny, slender, spindly, thin, twiggy

「瘦身」を表す英語の単語には、唇子音があまり含まれておらず、日本語の例には全く含まれていない。

田守・スコウラップは、この事実を次のように説明する。唇子音を発音するとき、口の中に球状の空洞ができるが、この空洞が肥満を象徴している。言い換えると、口の中の球状の空洞は、肥満と類像関係にあるとする。

## 2.2. 「さ」と「す」の滑らかさ

Hamano (1986) が指摘するように、「さ」と「す」に共通するのは、どちらも/s/の音を含んでいることである。/s/を発するとき、空気が口から出てくるのを完全に阻害するような閉鎖がないという音声的な特徴（連続音性）が滑らかさを表していると考えられる。日本語と英語の例は以下の通りである。

- (4) 日本語：さくっと包丁を入れる、血液さらさら、さわさわ波たつ  
さっぱりした性格、お肌すべすべ、すいすい泳ぐ、すくすく育つ、するする降りる

英語：sling, sprint, stroll, scrawl, skim, slash, slide, slip, spout

## 2.3. 水しぶきの音

田守・スコウラップ (1999) が述べているように、日本語には水しぶきの音が非常に多く見られるが、英語では日本語ほど多くはない。

- (5) 日本語：bachaQ (bacha-bacha, bachaN, bachari), bashaQ (basha-basha, bashaN-bashaN, bashari), bichaQ (bicha-bicha), bochaQ (bochaN, bochari, bocha-bocha), bosha-bosha, chabu-chabu, chapo-chapo (chapoN), jabo-jabo (jaboN, jaboN-jaboN), jabu-jabu, pachaQ (pachaN, pacha-pacha, pachari), pashaQ (pashaN, pasha-pasha, pashari), pochaQ (pochaN, pocha-pocha, pochari), poshaQ, shabu-shabu, zabuQ (zabuN, zabuN, zaburi, zaburi-zaburi, zabuuN, zabu-zabu), zaNbu (zaNburi)

英語：splash, slosh, splish-splash, sprinkle, spray, spatter, slop, slush, plunge

日英語に共通する点として、/b, p/の音、つまり両唇閉鎖音と粗擦音が含まれている。

## 2.4. 急な終わり方

音や動作が急に終わることを表すオノマトペには、日本語では促音、英語では/p/, /t/, /k/ が含まれているが、これらは無声閉鎖音に該当する（括弧内が対応する日本語である）。

- (6) beep (piQ), bump (kotsuQ), flick (bachiq), slap (pishiq), spit (peQ)

これらが発音すれば感じることであるが、/t/や促音のような無声閉鎖音の前では母音は短音化され、短く切り取られたような終わり方という印象を与える。言い換えると、語末の無声閉鎖音が音や動作の急な終わり方を象徴していると考えられる。

## 2.5. 母音との対応

母音とオノマトペとの関係は、Hamano (1986) に基づいて考察する。

### 2.5.1. /i/

母音/i/は甲高い音と結びつけられる。日本語の例は(7a)であり、(7b)は/i/以外の母音を含んだ例である。同様に、英語でも、/i/とそれに近い/i/, /j/ (高・前舌母音、半母音)は甲高い音と対応しているようである。

- (7) 日本語：a. piQ, piN, chiN, kiiQ, kiiN, riiN, piri-piri, kiri-kiri, chiN-chiN, chiriN-chiriN  
b. paN, poN, kaaN, kooN, puu-puu, koN-koN, toN-toN  
英語：shriek, squeak, scream, shrill, screech, beep, mewl, yelp

(7b) にみられるように、/i/以外の母音を含んだ語は甲高い音を表さない。

### 2.5.2. /a/

母音/a/は澄み切った音・音の広がり (expansiveness)、平べったさ (flatness) を表すとする。

- (8) 日本語：bari-bari, gaaN, gatsuN, paN, pakaQ, pata-pata, pari-pari  
英語：splat, smash, slap, slam, flatten, mash, squash, smack, spank, swat

これらの語では、/æ/を含むものが多いが、外来語では/æ/は/a/で代用されるので、音象徴的には大きく異なる。

### 2.5.3. /o/

母音/o/は鈍くて不明瞭な音、こもった音、小さい出来事、小さい部分と音象徴的に対応する。

- (9) 日本語：bori-bori, goon, boN, gotsun, mogo-mogo, moso-moso  
英語：hop, plop, toss, bob, pop, dot

これらに含まれている/o/は/o/に音声的に近い。

母音/a/と/o/が上記のような音象徴的な対応をするのは、前者が大きな口を開けて発音されるのに対して、後者は前者ほど口を開けずに、こもった音がするためであるとする。これは次の対比からもわかる。

- (10) a. {ぱっ／ぼっ} と顔が赤くなる。  
b. {ぱっ／ぼっ} と火がつく。

「ぱっ」は顔全体が赤くなる様子を表すのに対して、「ぼっ」は顔の一部が赤くなる様子を表す。また、「ぱっ」は火が全体に広がるのに対して、「ぼっ」は部分的に火がつくだけである。

#### 2.5.4. /u/

母音/u/は、小さい、突出した丸いもの、柔らかくて控えめな音と音象徴的に対応する。

- (11) 日本語：puN, puQ, tsuuN, kuN-kuN, kuu-kuu, shuQ, shuN  
英語：spout, pout, spew, protrude, snout, snoot

この音象徴性は、/u/の唇音性によるものとする。

#### 2.5.5. /e/

母音/e/は、(12)の例に見られるように、動作の不適切さ、下品さと関連づけられる。

- (12) 日本語：keba-keba, geQsori, geNnari, seka-seka, tekku-tekku, dere-dere, nechi-nechi, neba-neba, neto-neto, beta-beta, beQtori, meso-meso  
英語：retch, belch, fleck, peck, wreck, fret, glare, mess, squelch, welsh

### 2.6. 子音との対応

#### 2.6.1. /k, g/

Hamano (1986) が指摘するように、軟口蓋音/k, g/は金属のような硬い表面との接触と関連づけられる。

- (13) 日本語：kiN-koN-kaN, kaQ, kii-kii, koN-koN, gaN, gaN-gaN  
英語：click, clink, clack, gargle, gobble, gulp

(13)の例は、何か硬い表面を叩いた時やそれが触れ合った時に生じる音である。

#### 2.6.2. /m, n, ŋ/

鼻音/m, n, ŋ/は、共鳴を音象徴的に表す。

- (14) 日本語：bataN, bochaN, gataN, dosuN, gatsuN, gachaN  
英語：bang, ring, ding, gong, drum, tinkle

特に、(15)に見られるように、Hamano (1986) は語頭の/m/は、はっきりしない状態、抑制を表すことが多いと述べている。

- (15) 日本語：mago-mago, mota-mota, moya-moya, moku-moku  
 英語：murky, mumble, murmur, mum, mask, maunder, muffle, muzzle

2.6.3. /h/

田守・スコウラップ (1999) は、(16) に見られるように、/h/は息、息の吐き出し、不確定、頼りなさ、弱さ、繊細な優雅さを表すと述べている。

- (16) 日本語：huQ, huu-huu, hikuQ, haa-haa, hoQ, ho-ho-ho  
 英語：hem, hiccup, ahem, ha-ha-ha, huff, hum, hiss, honk, howl, hint, hedge, hazy, hesitant, hover

2.6.4. fl-と gl-

英語のflの音は英語独特と考えられているが、田守・スコウラップ (1999) は、本当にそれに対応するものが日本語にないのか考察している。

- (17) 英語：flap, flop, flare, flash, fly, fling, flutter, fleet

英語のflは素早い動きを表すと考えられている。もちろん、flで始まる語のうち、flab, fleck, flaccid, flatのように素早い動きとはまったく無関係な語も多く存在するが、「音象徴に関して個々の音と意味の関係が絶対に規則的でなければならないとは主張していない」(田守・スコウラップ 1999: 141)。

英語のflに対応するものがあるか考えると、そもそも日本語には/f/と/l/の音がないという問題が生じるが、それらの音に近い[ɸ]と[r] (借用語の場合) で比較できる。また、日本語ではflのように子音が連続しては起こらない。これらの日英語の相違点を前提にすると、日英語では次の対応関係があることがわかる。

- (18) a. [l]-[r]  
 flame, flap, flick (er), flutter <—> hira-hira  
 flare <—> mera-mera, mura-mura  
 flash <—> gira-gira, chira-chira  
 flick <—> bero-bero, chiro-chiro, choro-choro  
 flip <—> patari, pera-pera  
 flit <—> hara-hara  
 flop <—> goroQ, daraaN  
 flow <—> dara-dara  
 flutter <—> hira-hira  
 b. [f]-[ɸ]  
 flighty <—> fuwa-fuwa

float <—> fuwa-fuwa  
fluff <—> fusa-fusa, fuka-fuka, fuwa-fuwa, fuku-fuku  
flurry <—> ata-futa  
flutter <—> fuwa-fuwa

c. [f]-[h]/[ç]

flame, flap, flick (er), flutter <—> hira-hira  
flap <—> hata-hata  
flick <—> hyuQ-hyuQ  
flit <—> hara-hara  
flutter <—> hara-hara, hata-hata, horo-horo

(田守・スコウラップ 1999: 143)

flame, flap, flick (er), flutter と hira-hira、flit/flutter と hara-hara、flutter と horo-horo の対応には、摩擦音と流音が日英語において同じ順序で関わっていることが観察できる。

英語の gl- の場合も日本語との対応が観察される。

- (19) glance <—> chira, chorori, jiro-jiro, kyoro-kyoro  
glare <—> gira-gira, girori, gyoroQ, jiroQ, kira-kira  
gleam/glimmer <—> chiraQ, gira-gira, kira-kira, tera-tera  
glimpse <—> chiraQ  
glint <—> chira-chira, gira-gira, kira-kira  
glisten <—> chirari, kira-kira, tera-tera, poka-pika  
glossy <—> tera-tera  
glow <—> hoka-hoka, teka-teka

(田守・スコウラップ 1999: 144)

日英語において関係している文節素は非常に類似しており、生起している順序も同じである。

### 2.6.5. sw-

田守・スコウラップ (1999) が指摘するように、英語の sw- について、これに対応する日本語は sawa-sawa と sowa-sowa のみである。英語では、swat, sway, sweep, swing, swipe, swoop が挙げられる。

これらの日英語は 'sideways movement' という「横揺れ」という意味に関係する。さらに、田守・スコウラップは /s/ と /w/ を分離して考え、/s/ は「前方への動き」、/w/ は「前後の動き」を表し、次のような対応関係を挙げている。

- (20) sway <—> yusa-yusa  
swish <—> sara-sara, saku-saku

(田守 2002: 172)

[ʃ]も[s]と同じ意味を表すとし次の例を挙げる。

- (21) 英語 : shimmy, shake, shiver, shuffle, shunt, shove  
日本語 : bishari, pashiQ, shabu-shabu, shari-shari, shuQ-shuQ

英語では/w/は「前後の動き」を表すと述べたが、日本語では/u/は/w/の代わりをしていると考えると次の例が挙げられる。

- (22) 日本語 : yura-yura, bura-bura, fura-fura, kune-kune, puri-puri, buN-buN, byuN-byuN, guru-guru, hyuu-hyuu  
英語 (/w/の「前後の動き」を表す単語の例) : waddle, wind, wobble, wamble, waggle, wiggle, weave

#### 2. 6. 6. 有声音と無声音

田守 (2002) にあるように、同じ出来事を描写していても日本語では、有声音と無声音で意味の違いが感じられるが、英語では有聲・無声の対立は、体系的には利用されていない。

- (23) a. {どんどん／とんとん} 戸を叩く  
b. {がんがん／かんかん} 鐘を鳴らす

有聲の「どんどん」の方が無聲の「とんとん」よりも叩いている音が大きいと感じられ、有聲の「がんがん」の方が無聲の「かんかん」よりも鐘の響きの度合いが大きいと感じられる。<sup>4</sup>

### 3. クメール語のオノマトペ

本節では、2節で提示された日英語のオノマトペの対応を基準にして、クメール語のオノマトペを分析する。ほとんどの語は辞書から抜き出したものであるが、一部はインフォマントから聞き取った語、確認した語を含む。<sup>5</sup>

#### 3. 1. 語頭子音/k/

語頭子音/k/であるオノマトペは多く存在し、種類もさまざまなものが含まれる。第1に、硬いものを叩いた時に発生する音の観点から分類する。例えば、日本語で対応する訳が「バリバリ」は、硬いものを砕いたり、かじったりして破壊する時の音である。



(24) a. 硬いものを叩く音

- [kɔp kɔp] コツンコツン、コンコン  
 [krək krək] カタカタ、コトコト (容器を振って中のものがたてる音)  
 [krop krop] バリバリ  
 [kroh] ガチャガチャ (皿などのぶつかる音)  
 [kriəp] パリパリ  
 [kɔkrɔn] (寒くて) ガタガタ (震えている)  
 [kruɔp kruɔp] バリバリ (犬が骨を砕く音)、パリパリ (せんべいをかじる音)

第2に、音が発生する時に、息(風)も発生するため、息の観点から分類する。これらの語において注目すべき点は、息に関係する音、つまり声門閉鎖音 (glottal stop)、/h/と氣息(記号<sup>1</sup>)が見られることである。

b. 息を吹く音、風が吹く音

- [kɔk<sup>h</sup>ək] クスクス (笑う)  
 [kɔk<sup>h</sup>i<sup>h</sup>ə<sup>h</sup>] ゲラゲラ  
 [k<sup>h</sup>i<sup>h</sup>ək k<sup>h</sup>i<sup>h</sup>ək] ゲラゲラ (笑う)  
 [k'ək k'ək] クスクス (笑う)  
 [k'cɛəŋ k'cɛəŋ] ギャアギャア (叱りつける)  
 [krih kruh] ブウブウ文句を言う  
 [k'u:h k'u:h] コンコン (空咳、結核のような咳の音)

第3に、「不明瞭さ」の観点から分類する。これらには鼻音が含まれている。

c. [k'ŋec k'ŋə<sup>h</sup>] ジグザグの

- [k'ŋək] グニャグニャした

第4に、日本語で見られるように、同じ音を同じ順で含んでいる表現を挙げる。

- d. [krɔlɔ:t krɔlap] (目を) キョロキョロ (する)  
 [k'pɛək k'pɛək] ポタポタ (落ちる)、ザーザー降る  
 [kɔkrɛək] グラグラ (沸騰している様子、音)  
 [kɔkrɛ'ət] ざらざらの (肌、壁、板)  
 [kɔkrit kɔkrɛ'ət] ざらざらの  
 [kru:t kru:t] ギリギリ (怒って歯ざしりする音)  
 [krum krum] (大きな木の倒れる音・雷の音)  
 [krui krui] とともゆっくり

ここまでの観察でクメール語のオノマトベが日英語と共通する点は、i) /k/は硬い表面を叩いた音、ii) /h/または類似の音は息(風)の吹き出し、iii) 鼻音は不明瞭さとそれ

それ音象徴的に結びつけられると考えられる。

### 3.2. 語頭子音/ŋ/

語頭に/ŋ/が生じた場合、主に動物のはっきりしない、不明瞭な（好意的ではない）気持ちを表すという意味と対応すると考えられる。

- (25) [ŋɔŋwɔk] コックリコックリと上下にゆれる  
 [ŋɔŋih ŋɔŋuh] グズグズ、ブツブツ言って命令通りしない  
 [ŋɔŋe:h] (子犬が空腹等で) キャンキャン  
 [ŋa:w ŋa:w] (猫のなく声)  
 [ŋu:l] (犬が唸る声)  
 [ŋə:t] (油のきれた自転車の音)  
 [ŋəm ŋəm] (他の犬に唸っておどかしながら犬が餌を食べる唸り声)  
 [ŋom ŋom] (トラの唸り声)  
 [ŋəw ŋəw] (口の中で) ブツブツ (いう声)  
 [ŋu:h ŋu:h] ブーブー、ブツブツ (文句を言う、しかしはっきりは聞こえない)  
 [ŋeh ŋeh] 犬がワンワン (鳴く)、(子供がいつまでも) グズグズ (泣く)

犬やトラが唸る時は、対象に対して好意を持っておらず、はっきりしない感情を持っていると考えられる。(26)にある/c/も/j/と同様に、口蓋音である。

- (26) [cɔcɔc cɔcɔc] ベチャクチャとおしゃべりする  
 [cɔp cɔp] クチャクチャ (音をたてて食べる)  
 [crɔk crɔk] トボトボと (哀れを催させるような様子で歩く)  
 [crop crop] パリパリ、ポリポリ  
 [c'ək c'ək] ガチャガチャ (ビンのような物が互いにぶつかる音)  
 [ɲək ɲək] (恥ずかしがって) もじもじする  
 [ɲuɲm ɲuɲm] ほほえむ、ニコニコする

### 3.3. 語頭子音/t/

語頭に/t/が生じる場合は、軽く叩くという意味とも結びつけられるが、表面がゆるいものの打撃から、不安定な表面を歩くことに拡張していると考えられる。

- (27) [tɔtɔp tɔtɔp] (赤ん坊、年寄りがかわいらしく) ヨチヨチ (歩く)  
 [tɔte:ŋ tɔta:ŋ] (酔っぱらいなどがみっともなく) フラフラ、ヨタヨタ (歩く)  
 [tɔp tɔp] (かわいらしく) ヨチヨチ (歩く)  
 [treh troh] (どちらにするか決められずに迷っている様子) フラフラ (歩く)、考えがフラフラ

[tətɪh tətəh] フラフラ、ヨタヨタ、千鳥足で歩き回る

### 3.4. 語頭子音/p/

語頭に/p/が生じる場合は、突発性の意味と対応する場合が多いと考えられる。

- (28) [pɔpɔc] ①水びたしの(土地) ②ベチャベチャしゃべる  
 [pɔɔpɔp pɔɔpɔp] チョコチョコ急いで(歩く)  
 [pɔvɔn pɔvɔn] ピョコンピョコン(と上がったたり下がったり)  
 [pɔsɛ:c pɔsɔ:c] バラバラになって、ちりちりになって  
 [pɔc pɔc] シトシトと(雨が降る)  
 [pɔn pɔn] ビクビクと怖がって  
 [p'laək p'laək] ピョンピョンと(跳ぶ)  
 [p'le:k p'lɔk] (欲しくて、関心をひかれて)ジロジロ、ジーッ(と見る)  
 (わからなくて目を)キョロキョロして、パチクリして(考えている)  
 [p'daək p'daək] (心臓が)ドキドキ  
 [p'<sup>ɔ</sup>ɔl p'<sup>ɔ</sup>ɔl] (ウサギのように)ピョンピョンと(ゆっくり長く跳ぶ)  
 [pɔp'lug] ポシャン、ポチャン、バシヤ、バチャ  
 [pɔrɛək] ピカピカ、キラキラ(光るダイヤ)  
 [pɔrɛət] あちこち散らばってピカピカ(光る)  
 [p'ɪɔ:k p'ɪɔ:k] コックリコックリ(居眠りする)  
 [p'luc] (ウナギのように)ヌルヌル、ツルツル  
 [p'lɛ:m] (へびが舌を)チョロチョロ(と出す)、(食べたくて口のまわりを)ペロペロ(なめる)

### 3.5. 語頭子音/r/

語頭に/r/が生じる場合は、その表現の中に含まれる他の音が意味と結びつけられると考えられる。例えば、鼻音が含まれる場合は好意的でない、不確定な意味と結びつき、/t/の音は不安定な表面を歩くことと結びつき、/h/に類する音は息の放出と結びつくと考えられる。

- (29) [rɔk'ɔɔn rɔk'ɔɔn] ザラザラした  
 [rɔŋə'<sup>ɔ</sup>a rɔŋə'<sup>ɔ</sup>] (骨がないように)クニャクニャと柔らかい  
 [rɔŋɪ:k rɔŋɔ:k] フニャフニャの(とても疲れきって力がない)  
 [rɔŋɔk rɔŋɔe] ベチャクチャしゃべってばかりいるうるさい(女)  
 [rɔtɔp rɔtɔp] ヨチヨチ歩く  
 [rɔvɪ:m rɔvɔ:m] ウヨウヨ  
 [rɔhə'<sup>ɔ</sup> rɔhə'<sup>ɔ</sup>] 息を切らしてハーハーする、疲れ切ってハーハーしている

[rɔləp rɔləp] ガツガツ (食う、呑み込む)  
 [rɔ'iaək rɔ'ai] 楽しそうにゲラゲラ笑う

#### 4. 結語

本稿では、日英語のオノマトベの対応を基に、クメール語のオノマトベを分析した。その結果、以下の音象徴的対応関係があることがわかった。

- i) 語頭子音/k/は硬いものを砕いたり、かじったりして破壊する音と対応する。
- ii) 息に関係する音が、音が発生する際に息も発生する語と結びつく。
- iii) 鼻音は不明瞭さと関係する。
- iv) 語頭子音/t/は軽く叩くという意味から不安定な表面を歩くという意味に拡張している。
- v) 語頭子音/p/は、突発性の意味と関係する。
- vi) 語頭子音/r/は、その表現の中に含まれる音が音象徴的に結びつく傾向がある。

最後に、田守・スコウラップ (1999) と同様に、本稿でも音象徴一般に対して、個々の音と意味の関係が絶対に規則的に対応しているわけではない、と主張するものである。

今後の課題として、辞書や文献の調査だけでなく、さらに幅広い年代の母語話者に調査する必要があると考えられる。

#### 注

- 1 これまでに指摘されてきたことであるが、日本語ではオノマトベが言語中に語彙として確立されているが、英語では日本語ほど確立されていない。また、日本語のオノマトベは、典型的には副詞として用いられる (田守 1993: 18)。例えば、「歩き方」の表現において、日本語では「ふらふら」「ぶらぶら」「ぶらぶら」という様態副詞を動詞につけて歩く様子を区別するのに対して、英語では 'stagger' 'ramble' 'stroll' というように独立した動詞を用いる。

日本語では、オノマトベを動詞で用いる際には、例えば、「にやにやする」「ぎょっとする」というように、「一する」という動詞に組み入れる場合が多い。その他にも、「一つく」を伴って動詞化される場合があるが、すべてが「一つく」で動詞化されるわけではない。例えば、(i) に見られるように、「にやにや」や「ぎらぎら」は「一つく」で動詞化できるのに対して、(ii) のように「にこにこ」や「きらきら」は「一つく」で動詞化されない。これは、「一つく」が潜在的に否定的な意味を持っているオノマトベにつくことによる。言い換えると、「にやにや」や「ぎらぎら」は否定的な意味を持つのである。

- (i) a. にやにや→にやつく
- b. ぎらぎら→ぎらつく
- (ii) a. にこにこ→\*にこつく
- b. きらきら→\*きらつく

(田守 1993: 50)

- 2 本稿では、擬音語・擬態語をまとめて「オノマトベ」としたが、それぞれ独自の特徴も指摘されている。例えば、日本語の擬態語は、それ自体は明確な意味を持たず、その意味は文の他の要素に依存する、とされる (Kita 1997, Tsujimura 2001)。
- 3 以下、例文中のQとNはそれぞれ促音と撥音を表す。

- 4 音象徴性以外で日英語のオノマトペにおける相違点として、アスペクトの違いが挙げられる。(i)に見られるように、日本語のオノマトペでは、語の反復でアスペクトの区別をすることが可能であるが、英語では、必ずしもこの区別は可能ではなく、また、日本語で可能な(ii)にあるような微妙なニュアンスの違いを表すことは難しい。

- (i) ぴかっと光る／flash (1回)  
びかびか光る／glitter (複数回)  
ぶるっと震える／give a brief shiver (1回)  
ぶるぶる震える／shiver (複数回)  
ぽきっと折る／snap (1回)  
ぽきぽきと折る／(英語では該当表現なし) (複数回)
- (ii) ぽきっ／ぽきり／ぽきん／ぽきぽき

(田守 2010: 12)

- 5 インフォーマントにおいて、地域・年代における違いが多少見られた。

#### 参考文献

- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*, Stanford: CSLI Publications (Tokyo: Kurosio).
- 和泉模久 (1986) 『カンボジア語入門』, 東京: 泰流社.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編) (1988) 『言語学大辞典』第1巻, 東京: 三省堂.
- Kita, Sotaro (1997) "Two-dimensional Semantic Analysis of Japanese Mimetics," *Linguistics* 35, 379-415.
- 坂本恭章 (1988) 『カンボジア語辞典』, 東京: 大学書林.
- 田守育啓 (1993) 「日本語のオノマトペの統語範疇」『オノマトペ—擬音・擬態語の楽園』 笈寿雄, 田守育啓編, 17-75, 東京: 勁草書房.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』, 東京: 岩波書店.
- 田守育啓 (2010) 「「ぴかっと光る」と「びかびか光る」は英語でどう表されるか?」, 『英語教育』9月号, 12-13.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ: 形態と意味』, 東京: くろしお出版.
- Tsujimura, Natsuko (2001) "Revisiting the Two-dimensional Approach to Mimetics: a Reply to Kita (1997)," *Linguistics* 39, 409-418.

